寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

各賞決定

第一回「木屋瀬の風景」写真コンテスト
金賞一作品
銀賞二作品
銅賞三作品
おめでとうございます!!

多数のご応募ありがとうございました

総評

「木屋瀬の風景」写真コンテストが前期・後期に分かれて行なわれました。前期90点・後期57点の応募がありました。後期の方が点数が減少していますが、内容的にはまとまってレベルも高かったようです。

全体的には季節感を出した花のある風景写真が少ないようでした。上位にはそれぞれ特徴を表現したものが入賞しました。

審査委員長　西尾　彪

金賞「名筆を偲ぶ」
小方　一男さん（北九州市門司区）

須賀神社参籠殿の天井に飾られた由緒ある絵馬などを、じっと見入っている少女の姿を通して、題名の如く名筆を偲ぶを描写しております。

画面の両側をやゝ暗くして絵馬を中心に、周囲に置いてある時計や提灯、薬罐なども、歴史を感じさせるアクセントになっております。

銀賞「指揮者奮闘」
中　賢一郎さん（北九州市八幡東区）

交通安全用のカーブミラーを実に上手に利用しております。ミラーに映った祭りの光景が圧縮されて賑やかさが増幅されています。

ミラーの赤い縁も画面の変化への引立に役立っています。

銀賞「蔵の前にて」
西山　京子さん（北九州市八幡西区）

木屋瀬の特色ある蔵の前で暖簾をバックに、休憩中の人物を上手に配置して撮っております。赤色の傘は現代を感じさせ、新旧のものが交錯したところが良かったと思います。

銅賞「扇天満宮境内」
安延　孝視さん（田川市）

堂々とした銀杏の大木を前景に大きく入れ、縁を伴った木の質感と、地面に散った黄色の広場に犬を連れた点景人物を入れたことにより画面に奥行きを出しました。

銅賞「木屋瀬宿場踊りの総踊り」
三浦　政人さん（北九州市八幡東区）

県の無形民俗文化財に指定されている盆踊りと思います。中央に主役となる男性の踊りのポーズの良いシャッターチャンスを撮っております。周囲には、お揃いの浴衣姿の踊る人と、見物人を入れて祭りの雰囲気を盛り上げています。

ただ惜しいのは中央の人物に軽くストロボを使って表情がもっと出しておれば更に良かったと思います。

銅賞「祭り参加」
平野　森栄さん（遠賀郡遠賀町）

この作品の良さは、祭り衣装の2人の子供さんの表情とポーズにつきます。撮影者とのコミュニケーションが良かったのでしょう。

又、バックの飴色の木の色が木屋瀬を表徴しています。

★4面に関連記事があります。

第二回 こやのせ座 能（のう）

毎年大変ご好評をいただいております「こやのせ座能」を今年も開催致します。初めて能を見る方や、お子様にも理解できるよう、現代語の訳本を当日配布致します。また分かりやすく解説も致します。

■ストーリー

狂言【仏師（ぶっし）】

田舎者が仏像を作ろうと、都へ仏師（仏像を彫る職人）を探しにくると、すっぱ（詐欺師）が、自分が仏師と名乗って近づく。すっぱは仏像を作る約束をする。約束の日に自分が面をつけて仏像になりすまそうとするが…さて結末は？

能【小袖曽我（こそそが）】

曽我十郎・五郎兄弟は父の敵討の機会をねらっていたが、富士の裾野の鹿狩りを好機とみて出発に先立ち里の母を訪ねる。母は出家させるつもりの五郎が寺を出た事を怒り勘当を申し渡していた。十郎は五郎を連れて母を説得し、勘当を許してもらう。二人は喜びの舞を舞い、狩り場へと出かけるのであった。

●日時
平成17年3月6日（日）
午後2時～午後4時15分頃
（午後1時開場）

●場所
長崎街道木屋瀬宿記念館　**こやのせ座**

●入場料
一般…前売り三〇〇〇円
（当日三五〇〇円）
高校生以下…前売り一〇〇〇円
（当日一五〇〇円）

●チケット
木屋瀬宿記念館・ローソン全店及びローソンチケット取扱のあるダイエー各プレイガイド

●問い合わせ
長崎街道木屋瀬宿記念館
TEL（〇九三）六一九一一四九

※注意…入場は小学生以上に限らせていただきます。

子供「能」体験教室

次代を担う小・中学生に日本古来の古典芸能である能・狂言・能の楽器を体験してもらい、日本の歴史文化をより深く理解してもらうことを目的として、子供「能」体験教室を開催します。一生に一度の体験。一生思い出に残ることでしょう。

■日時　平成17年3月6日（日）午前10時～（午前9時45分までに集合）
■場所　長崎街道木屋瀬宿記念館こやのせ座　TEL（〇九三）六一九一一一四九
■定員　50名（先着順）
■受講料　無料
■申込方法　2月8日（火）～2月25日（金）まで（9時～17時）に電話でお申し込み下さい。

「木屋瀬の風景」写真コンテスト作品展 及び 出張展示のお知らせ

みちの郷土史料館企画展示室にて「木屋瀬の風景」写真コンテスト作品展が開催されていますが、木屋瀬を広くＰＲするために、作品を出張展示することになりました。いずれも入場無料（みちの郷土史料館は入館料が必要）ですので、お近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄り下さい。

みちの郷土史料館 有料
平成17年１月22日(土)～２月27日(日)

門司港レトロ 旧大阪商船 無料
平成17年３月７日(月)～３月11日(金)

アクロス福岡２Ｆ 交流ギャラリー 無料
（福岡市中央区天神）
平成17年２月16日(水)～２月21日(月)
「第3回 福岡県内市町村観光写真コンテスト優秀作品展」に、厳選した20点を出展します。

「長野眞屋展」報告!!

平成16年10月９日(土)～11月14日(日)まで、みちの郷土史料館において、町並み資料館シリーズの第七弾として、企画展「長野眞屋展」が開催されました。

この企画展では、改盛町の長野眞屋が所蔵する、明治時代の貴重な生活道具類や古写真など、全50点を展示しました。

期間中の来場者は1,524人でした。ご来館ありがとうございました。

木屋瀬・黒崎レール＆ウォーキング

昨年福岡県内で 第19回 国民文化祭・ふくおか2004とびうめ国文祭が開催されました。ここ木屋瀬では、11月３日(祝)の"筑前木屋瀬宿場まつり"の日に「木屋瀬・黒崎レール＆ウォーキング」を実施しました。これは、江戸時代の長崎街道筑前六宿のうち、黒崎宿と木屋瀬宿の歴史を、筑豊電鉄とウォーキングにより探訪するものでした。

八幡西区役所横御手洗公園に集まった約300名の参加者は、マップを手に、黒崎宿へと歩み出して行きました。木屋瀬宿では、多くの人出で賑わっている宿場まつりを楽しみながら、木屋瀬宿記念館にゴールしました。ゴールした人々は、程よい疲れと、建物の白壁や宿場踊に江戸時代の風を感じて、心地よい感動に包まれているようでした。

木屋瀬春席 恒例の木屋瀬春席を４月６日(水)に実施します。**柳亭燕路**さんの落語と太神楽の予定です。**お楽しみに!**

講座「木屋瀬 時代（とき）の散歩道」が終了しました!!

平成16年10月１日(金)～11月19日(金)までの毎週金曜日、講座「木屋瀬時代の散歩道」が開催され、26人の受講生全員が講座を終了しました。

全八回の講座では、九州大学の丸山雍成名誉教授、梅光学院大学の岡野信子名誉教授、北九州市立自然史・歴史博物館の永尾正剛参事、木屋瀬みちの郷土史料保存会の水上裕会長、同会の井上昭太郎副会長から、貴重なお話をいただきました。また、座学だけでなく、木屋瀬の町並み探訪、小倉城下町や津屋崎千軒のフィールドワークにも赴きました。

修了式後の懇親会では、「木屋瀬の歴史についての知識や理解がより深まった」という声も聞かれ、終始和やかな雰囲気のうちに講座を終えることができました。

なお、今年の受講生の中から５名の方が、まちなみ案内ボランティアに参加してくださる事になりました。

この講座は来年度も開催を予定しておりますので、興味を持たれた方は記念館までお問い合わせください。

大盛会!! 大成功!! 第12回 宿場まつり

今回は国民文化祭行事とも重なり　又　昨年に続き天候にも恵まれ　大盛会のうちに恙無く挙行出来ましたことを　ご参画・ご協力戴きました皆様方に　心よりお礼を申し上げます。

"木屋瀬の歴史と文化を活かした町づくり"の趣旨のもと始められた「筑前木屋瀬宿場まつり」も　早12回　紆余曲折と試行錯誤を経ながらも　今では住民の方々のご理解の元　木屋瀬住民の共有する「歴史的文化財産」である「宿場踊り」を中心とする「伝承盆踊りの祭典」へと発展し　又　其の類い稀な特性を活かした指向を以って名声は年々広く高まり　名実共に木屋瀬の歴史と文化を活かした行事へと育って参りました事を慶びといたします。

尚　今回特筆すべきは　新しい試みとして須賀公園にてフリー・マーケットを開催致しましたが30店余が出店と云う盛況に　従来の旧街道筋と須賀神社に限られていた「まつり」の庭が大きく広がると共に来訪者の層も広がった感が致します。

又　開催当日を期して　旧街道筋の新地では　町屋(旧松本新宅)を活かした"江戸あかりの民藝館"が開館　木屋瀬に新しい名所が誕生すると共に新しい風を吹き込みました。

回を重ねる毎に充実してくる「筑前木屋瀬宿場まつり」の　更なる発展と飛躍を祈念致します。

第12回　筑前木屋瀬宿場まつり実行委員会
副実行委員長　柴田　泰助

シリーズ　筑前木屋瀬宿

第三回　曹洞宗　永源寺

長崎街道木屋瀬宿記念館のある、本町筋の街道を東構口（黒崎）方面へ少し行くと四つ角があり、それを過ぎると急に道幅が狭くなり中町地区に入ります。

この地区は、木屋瀬独特の建築様式である、"矢止め"と伝えられる家並みの様式が今に残っています。そのまま街道を行くと左に入る横丁があります。通称、寺道と言われる小路です。寺道の突き当たりに、銅板葺きの本堂と二層の山門を構えた寺院が見えます。木屋瀬の景観の中でも私の好きな場所ですが、朝晩響く梵鐘の音も風情があります。

永源寺山門

山門の横には、鼻の欠けた地蔵さんが赤いよだれかけをして立っておられます。このお地蔵さんは、昔、大水が出て子供たちが乗った船が流されそうになったとき、助けられたという言い伝えがあります。また、お地蔵さんの前で、子供が"まっくり返る"と、その年は、無病息災に過ごせるともいいます。毎年八月二十四日には、境内で地蔵盆が催されています。

永源寺は、道元禅師を宗祖とし、永平寺を本山とする曹洞宗のお寺で、黒田藩の祈願所であったとも伝えられています。山門横の縁起によると、もとは金剛山の麓で金剛寺と称していましたが、兵火にあい焼失。大永三年（一五二三年）現在地に移り、大儀山永源寺と号するようになったと記されています。

寺は金剛山を正面として建てられています。本堂の内陣には、聖観世音菩薩立像が安置されていますが、この佛像は市の有形文化財に指定されています。

聖観世音菩薩

境内には、保存樹の銀杏の大木があり、その横に道元禅師の歌碑があります。

「春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえてすずしかりけり」

この和歌は、文豪　川端康成が、ノーベル賞受賞の記念講演の"美しい日本の私"でも引用されましたが、仏教の極意を伝える歌でもあります。

道元禅師は、仏道は「只管打坐（しかんたざ）」と言われ、ただひたすら坐禅することがさとりを得る道であると教えられました。永源寺では、毎月三の付く日に午前六時から、坐禅会が行なわれています。どなたでも参加できます。

山門を一礼して出ると、隣の木屋瀬保育園から、子供たちの歓声が聞こえてきました。私も六十年前この保育園の園児として、本堂での演芸会や境内の砂場で遊んだ記憶が昨日のように思い出されました。

石垣塀沿いに裏にまわると、そこには木屋瀬の宿場時代の貴重な建造物である、お茶屋（本陣）門があります。この門は、明治三年、本陣廃止に伴い崩されるところを、永源寺に移設されたものです。場所は当初より変わりましたが、宿場時代の木屋瀬の歴史を語る貴重な遺産です。

お茶屋（本陣）門

わが胸の佛を尋ぬ去年今年　靖彦

本町　野口靖彦

第四回　木屋瀬いろは歌留多大会
真剣な子供の目　キ☆ラ☆キ☆ラ

子供達がキラキラと目を輝かせて何かに真剣に取り組む様子は何物にも代え難い感動を覚えるものです。

正月恒例となりました「こやのせ座」《木屋瀬いろは歌留多大会》は　一月十日　参加者　見学者等二百余名が集い賑やかに執り行われました。「夢中になりすぎて頭をぶつけない様気を付けて下さい」という競技上の注意が有る程であちらこちらから歓声が上がり外の寒さを忘れさせるような熱気に包まれていました。

故・岩井屋不彫さんが残された木屋瀬独特の歌留多は単に競技や遊戯としての物だけではなく　郷土の歴史や町並みを知る上での教材として現在では小学校・中学校で　折りに触れその内容の研究などが行なわれ　発表されている事も広く知られています。このような独特の文化を残して頂いた　大先輩並びに　貴重な資料を快く提供頂いた　岩井屋不彫さんの孫　岩井屋当主・岩尾二郎氏に深謝いたします。

予選の一回戦が終わると　早々と負け組の子供たちが熱戦の話をしながら　お目当てのぜんざいを何杯もお代わりしている様子に　ボランティアのお母さん方も忙しく応対しながら話に聞き入っていました。用意した約百五十人分のぜんざいは　残らず皆さんの胃袋に納まったことも付け加えておきます。記念品の歌留多を染め抜いた手ぬぐいや　抽選会で当たった品物を手に皆が帰路に着いたのは冬の夕闇が迫る頃でした。また来年も多くの方々の参加をお待ちしています。

入賞者（敬称略）

【小学生の部】

優　勝　萩岩　絵里花（木屋瀬小学校）

準優勝　尾中　杏佳音（木屋瀬小学校）

三　位　大原　もも（星ヶ丘小学校）

三　位　小畑　舞（星ヶ丘小学校）

【一般の部】

優　勝　中原　浩和（八幡東区）

準優勝　山本　洋子（星ヶ丘）

三　位　奥　智照（木屋瀬）

三　位　尾中　美穂（木屋瀬）

こやのせ座運営部会委員　松井　修

文化発信の寄せ太鼓。こやのせ座発、全国行き。ホームページ http://www.city.kitakyushu.jp/~k7904180/index.html

子供ゑびす頭

12月4日(土)・5日(日)

須賀神社にて13名の児童により、子供ゑびす祭り（昔は数えの11歳、現在では小学4年生の男子を「頭（かしら）」と呼びお祝いします。）が行われました。　初日はあいにくの雨でベニヤ板の天井を張った山を曳き、ビニールで覆った社宝を持った御神幸行列、翌日は一転して好天の中、山笠を曳いた後、祝いつ膳につき、滞りなく2日間の行事を終える事が出来ました。

今回、子供たちがこの行事を経験した事で地域の伝統や文化に関心を持つと同時に、お世話になった方々への感謝の気持ちや、練習の間、手に豆ができ泣く子もいましたが、みんなで励ましあいやり遂げるという仲間の大切さを学んだことと思います。

年々参加者が減っているこの行事、地域の皆様の御協力により成り立っていることを改めて感じ、少数でも出来る仕組みが必要だと思うと共に、子供たちにとって忘れられない故郷の思い出となる子供ゑびす頭、後世にも絶える事なく引き継がれていく事を心から願っております。

最後になりますが、準備の段階から山笠解体まで御協力頂いた多くの方々にお礼申し上げます。

子供ゑびす頭
世話人　八尋弘文

宿場の正月

宿駅は公用の旅行者に人馬を提供し休泊の便を計るためのものであり、その費用に対する助成金が僅少のために民宿の負担が多かった。宿駅木屋瀬にもその重荷はあった。

三代将軍家光の時代となり参勤交代制が確立し、全国二百余の大名達が江戸と領国との間を年々往復することとなってからは、今までの政府の役人達とは違い大名達は人馬の賃銭や休泊の諸費は即座に支払うので宿場は大いに潤った。

庶民の往来も多くなり商工業も発展した。加えて木屋瀬宿には本陣脇本陣あり、郡家あり、問屋あり、宿場の機能が集中していたので本町の宿民は何らかの役目を持ち、羽織りなどの費用が多かった。こんなことで本町宿民は本町羽織り衆と呼ばれていた。

明かり障子を張り替え、家紋や屋号を達筆に大書し、表通りは川砂で清め、軒先にはオトビを奉じた七五三飾りを張り巡らし新しい年を迎える。初詣の鈴が鳴り渡る町は明かり障子の明かりの中である。各家々はこれより十五日間は表戸を閉ざす。

年始廻りの男達が羽織袴姿に屠蘇の酔いを見せながら、出会いの人々と年頭の言葉を交わしていた。お正月の装いなりて、美しい姿に夢のような嬉しさにはずんでいる娘達、髪の飾りが気になる娘、玄人帯の小粋な娘、紅緒の下駄に素足の娘、羽子板を大事に抱いている児、みんなみんなお正月を祝う晴れ晴れしい姿であり、錦絵のようであった。

人々も家々も砂の通りも、明るくて清々しくて、ふくよかな淑気に包まれていた。

わたしの昔話

柴田豊廣遺稿集より

"史跡"短見　～その四～

水を治めるものは国を治めるといわれ、治水は一国の行政を左右するものです。が、いくら目の前に大きな川が流れていても、水を引くことができなければ田はつくれません。

今から約二百三十年前、下流の下境、赤地、頓野、感田、知古、木屋瀬、楠橋の七ケ村の農民たちは、彦山川や遠賀川という大河を目の前にしながら、取水することができずに毎年干ばつに泣いていました。

明和七（一七七〇）年、感田村の大庄屋善吉は、鞍手・遠賀の郡奉行・嶋井市太夫と相談して彦山川の中に堰（せき）を造ることを計画しました。上流に造るほど灌漑（かんがい）面積が広がるので、隣の豊前（ぶぜん）藩領に接する岡森に造ることにして一応の了解は取っていたのです。

工事は同年から始まり、仮井手を築き取水に成功し、本工事は安永元（一七七二）年完成したのです。勿論問題がなかった訳ではなく、仮井手が不完全だったため年貢米を運ぶ田川の舟が損傷し、その「あいさつ料」として堀川運河の通行料を無料にしたり、特に天保十二（一八四一）年豊前の水上村では、築定のため自村の田畠が水浸しになり、そのため筑前の村々は、毎年二百八十俵余を水上村に「水障り助合米（たすけあいまい）」として、明治四年までの二十九年間負担しています。

その後も水をめぐる騒動は明治・大正・昭和と続き、昭和四十年上流・下流の代表者の外に福岡県も加わり、円滑な解決ができ、直方市・北九州市岡森用水組合ができたのでした。更に木屋瀬では、第二取水口として、昭和四十四年今の生コン横に小型なりともできていて「岡森揚水記念碑」が建っています。

今の水路はコンクリートで固められていますが、昭和三十年代までは昔のままの素堀りで、田植時期には満々たる流水が小さな「せき」を越え、音をたてて田畠に流れ込んでいて、夏はホタルが乱舞し、周辺の主婦達の「洗濯場」でもあったと言います。

有名な「堀川」に流れ込むこの水路は、先人達が残してくれた貴重な歴史遺産であるので、これを守るのも、今を生きる私たちの責任であると痛切に思う一人であります。

木屋瀬みちの郷土史料保存会
会長　水上　裕

宿場町木屋瀬（こやのせ）。伝統を受け継ぎ次世代を育む木屋瀬宿記念館。